

書評

小田部雄次著

『徳川義親の十五年戦争』

伊香俊哉

徳川義親は、三月事件の際に大川周明らに資金援助をしたり、戦後の日本社会党結成の際に加藤勤十に資金援助をしたことなどで知られる侯爵である。徳川については自伝の『最後の殿様』があり、彼の活動の一端はそれによって従来ある程度知ることができたわけだが、当然謎の部分も多かった。今度本書が書かれるにいたった背景には、著者が栗屋憲太郎氏とワシントンの国立公文書館で資料調査をおこなった際に「徳川義親日記」を発見したことがあり、その「徳川日記」に徳川個人に留まらず、十五年戦争にかかわる興味深い新事実が数多く含まれていたことが、著者に本書を著わさせる大きな動機となったといえるだろう。本書の構成は次のようになってゐる。

- はじめに
- I 最後の殿様
 - 1 尾張の殿様 2 多彩な行動の足跡
- II 「華族は皆かうして没落してゆく」
 - 1 理財の殿様 2 華族の「御意見番」
- III クーデターから南進へ
 - 1 三月事件とのかかわり 2 とりまく国家主義者たち 3 国家改造運動の推進 4 南方関与
- IV シンガポールへの道
 - 1 日中全面戦争の中で 2 日中戦争下の政治工作 3 「大東亜戦争」の勃発
- V 「昭南島」の日々
 - 1 第二五軍軍政顧問 2 昭南博物館長 3 「大東亜共栄圏」の夢と現実
- VI 「又、元の学究に戻るのみ」
 - 1 徹底抗戦 2 敗戦直後

おわりに
まず本書の概要を紹介しておこう。I章とII章では、十五年戦争期の徳川の活動の基盤がどのように形成されたかということが、前提的に分析されている。すなわちI章では徳川の生い立ち、血縁・婚姻関係により形成された華族社会における徳川の位置、後に重要な意味をもつことにな

るマレーのジョーホールのサルタン及び石原広一郎との出会いなどが述べられている。II章では尾張徳川家の資産運用、徳川の貴族院改革論、徳川一門の経済的動揺などが分析され、華族の経済的基盤の動揺が徳川を「革新」的行動へ向かわせた背景として述べられている。

III章からVI章までが十五年戦争期の徳川の活動について述べられているところである。III章では三月事件への関与の具体的内容が「日記」をもとに示され、その上で徳川を「とりまく国家主義者たち」の姿とその「結集」の過程、さらに大川周明、清水行之助、石原広一郎、藤田勇といった人物と徳川の日中戦争前までの動向、三〇年代中ごろのサルタンおよび石原との関係がおもに述べられる。IV章では、徳川の翼東政権援助、日中戦争への対応、排英運動への積極的関与、四一年春のシンガポール工作への関与、太平洋戦争開始後の軍政顧問としてのシンガポールへの赴任、南方軍政下の華人对策・アヘン政策などが述べられている。V章では徳川の軍政顧問としてのサルタン対策・文教政策への関与、昭南博物館にまつわる南方軍防疫給水部や南方科学委員会の活動、徳川の軍政「失敗」の自認と帰国などが述べられている。そして、終章のVI章では帰国後の動向について述べられており、八・一五クーデター計画との関係、敗戦直後の社会党結成準備への関与、天皇退位論、徳

川や大川・石原・清水・藤田などの東京裁判での立場、徳川の爵位辞意、華族制度廃止について述べられ、晩年から死去にいたる時期が概観されて結ばれている。

さて、著者の本書における関心は、単に徳川義親という一個人が十五年戦争期にどのような行動をしたかということとを明かにしようというものではない。それは、「華族の一員であった徳川が、この時期にどのような政治行動を展開したのか具体的にあとづけることは、天皇制を支えてきた『皇室の藩屏』とよばれる社会集団の存在が日本帝国主義による侵略戦争の遂行にどのような役割を果たしていたのかを説明するひとつの糸口となる」（五頁）という著者の言葉からも明かである。すなわち、天皇制の社会秩序の重要な構成要素である華族社会というものの変動・動揺が、政治の場にどのように還流されていたのかということとを、十五年戦争前後の徳川義親の行動を通じて分析することが、本書の最大の目的だといえるだろう。I章・II章で、一九二〇年代から三〇年代にかけての華族社会のありように論及されているのはそのためである。

I・II章の分析をふまえて、著者はII章の最後で、「『皇室の藩屏』たる華族の没落は、上層華族の一員たる義親にとっては天皇制国家の体制的危機を意味しており、このような危機感が『革新華族』としての義親の行動を支えてい

たと考えられる」（六〇頁）と、徳川の行動を支えた意識を分析する。この体制的危機感が行動を支えていたという点については、もう少し頁をさいてまとめて展開して欲しかったように思う。つまり、そうした危機感が確かに行動の源泉にあったとしても、そうした危機感が「革新」的方向で発現するか、「反動」的方向で発現するかという問題がもうひとつあるように思うからである。徳川の「革新」性については本書の五〇～五二頁で近衛文麿・木戸幸一らとの比較も加えて論じられ、また六二頁では清水行之助と同様の政治認識を徳川がもっていたとされているが、より演繹的に徳川の「革新」性を問う作業が展開されるべきではなかったかと思う。その点で、徳川の貴族院改革案における職能代表制導入論や一九二五年の治安維持法制定反対という行動については、もう少し細かく言及してもよかったように思われる。すなわち一九二〇年代における、華族の経済的動揺と裏腹に成立してくる大衆社会状況に対する一定の認識を、徳川はもっていたのではないかとも思われるからである。

また徳川が抱いた体制的危機感が、当時の華族にどの程度共通していたのかという点も興味をもたれる。近衛や木戸にとどまらず、十一会その他のメンバーとも比較してくれば、徳川のどのような点が当時の華族の中で個性的であったのか。

二二年のマレー旅行に軍用地図作成の目的があったという説や、「大正十四年以来私は南方のことばかり考へつづけてきた」という徳川自身の回想からすれば、徳川が二〇年代からの「南進論者」であったということには根拠がある。しかし、徳川自身が南進論者であったということと、徳川が三月事件を「南進実現のための一方策」として認識していたということは次元が異なる問題である。徳川が三月事件を南進との関連で認識していたという根拠は石原の回想に置かれているが、神武会・明倫会が「北守南進」を主要な主張にしていたとも思われないのであり、やや石原の回想に引きつづいた評価ではないかと思われる。むしろ徳川の南進論は、三〇年代に石原及び石原産業との関係を深めていった過程で、そして日本の対外侵略の矛盾が激化していった過程で、具体的な目標として認識され始めたといえるのではないだろうか。

もはや紙幅が尽きてしまったので最後にもうひとつだけ疑問に思ったことを述べておきたい。徳川とその周辺に群がった清水行之助、藤田勇、大川周明、石原広一郎などとの関係さらに彼らの従来知られてなかった行動を明かにすることは本書の大きなメリットの一つであった。ただ疑問に感じたのは、著者が、徳川を清水らの「御輿」であったと評価している（二二〇頁）点である。「御輿」とはかつぎ

たのがより明確に示されたのではないだろうか。

華族ないし華族社会と十五年戦争のかかわり方ということが本書の通奏低音をなすのであれば、主旋律をなすのが徳川の十五年戦争とのかかわり方であり、とりわけ徳川の南方関与の問題である。著者は、二〇年代初頭に始まるマレーのサルタンや石原広一郎との交流に徳川の南進論の源流を見いだし、その流れの到達点として徳川の第二五軍の軍政顧問就任を描いている。残念なことに、軍政顧問赴任直後の四二年二月から五月までの三カ月あまりの期間の徳川の記事は空白であったが、著者はここで、眼を徳川個人からマレーやスマトラなどの南方軍政のあり方へと転じ、諸資料や先行研究により華人対策・アヘン政策の実態をクロージアアップして見せてくれている。ここでもII章の華族財産問題への敷衍と同様に、著者の関心が徳川個人にとどまらない広がりを見せており、本書全体に興行きを与えていることになっている。

ただ徳川の南進論への傾倒についてやや疑問が残るのは三月事件と南進の関係である。著者は、「三月事件以後の国家改造運動に加担した徳川達の政治行動が、当初から南進の企図を秘めていた」（七四頁）、「徳川の三月事件をはじめとする一連の国家改造運動への関与は、南進実現のための一方策であった」（二二二頁）と評価している。一九

上げられ、祭り上げられる人を例えているものであり、本書に見られた徳川の姿にはそれはあまりあてはまらないイメージではないだろうか。三月事件に対する資金援助や、大川釈放をめぐる経緯などを見ていると、「御輿」というよりもむしろ端的にパトロンといった方が近いように感じるがどうだろうか。

ほんのいくつか疑問を述べたところで、紙幅が尽きてしまった。本書は、従来ほとんど取り上げられなかった、華族社会の動揺が十五年戦争期にどのように政治的に発現したのかという問題を、徳川義親という一人物を通じて検討した意欲にあふれる本である。新資料をふんだんに盛り込み、学術的な内容にもかかわらず、文章もいたって平易で読みやすい。現代史をあまり知らない人にもぜひ一読を勧めたい本である。

（小田部雄次氏は本学非常勤講師、伊香俊哉氏は本学史専攻後期課程在学中）

（青木書店・一九八八年六月刊・A5判・二二三頁
一九〇〇円）